

## 恐怖のお荷物

1

うらかな日曜日。花見のシーズンも近づき、暖かな一日を、本来なら海辺か川べりにバイクでかつ飛んで過ごしたいところだが、僕と親父は新宿にいた。

歌舞伎町のどまん中にある喫茶店を借りきった、ある式典に招待されていたのだ。

「向井康子さんの出発を励ます会」と、喫茶店の入口には紙が貼られている。

喫茶店の中央にはステージが作られ、フツの恰好をした康子が立っている。喫茶店を埋めた客の大半は高校生なのだが、どれも皆、フツの高校生ではない。スケ番、番長、暴走族——制服も、膝まであるような超長ランやら、チャイナドレスのようなギンギラ戦闘服やら、つまり、ツッパリグループばかりなのだ。

康子は、タレント学園として有名なJ学園のスケ番をずっと張っていた。そしてこの春、ついに引退することになったのだ。

康子の死んだ親父さんというのが、戦後日本を代表する(?)有名な強請り屋で、その遺産である「鶴見情報」をめぐる争いに、我が「サイキ・インヴェステイション」が巻きこまれたのが一年半前。

康子はそのとき、タレントデビューが決まっていたのだが、ヤクザ、殺し屋、オカマ、果ては国家権力までが介入するその争奪戦にほとんど嫌げがさし、デビューを蹴ってしまった。

以来、硬派ひと筋。だが、三年間の高校生活の終わりを迎えるにあたって、引退する日がやってきたのだ。

——先輩！

——ヤスコさん！

黄色い声がとび、あちこちからすすり泣きがもれる。後輩から贈られた花束で、康子は埋まっていた。

来賓には、冴木親子の他に、僕の家庭教師麻里さん(元レディス暴走族のリーダー)なのよね。今は弁護士のお卵だけども、新宿署の少年係の刑事サン、各有名ツッパリ校の歴代番長、なぜかゲイバーのママまでがいて、結構、ゲンシユクな雰囲気。

康子は愛用の「戦闘服」を、跡目を譲る後輩に手渡し、マイクを握った。

心なしか、目がうるんでおる。

「あたしは今日で、フツの女の子に戻ります。ですけど、お前たち（ここできつと後輩をにらむ）、あたしがいなくなっても、アンパンやシャブに手を出したり、ヤクザの誘いにのってウリ（売春）をかましたりするんじゃないよ。万一、そんな噂が聞こえてきたら、あたしはいつでも封印を破るからね」

「来賓席」にすわる親父の膝の上には、封印された、康子愛用の匕首がある。

親父はさつきこれを受けとり、責任をもって保管すると告げたのだ。

会場はしんと静まりかえった。

「あたしたちは皆んな落ちこぼれだけど、落ちこぼれには、落ちこぼれの青春がある。人さまに迷惑をかけない限り、どんな青春を送ろうと、それはその人間の自由だと、あたしは思っている。でも、皆んな、一生、落ちこぼれでいようとは思っていない筈だ。今は今。でもこれからは少しずつ、先のことを考えて生きようとして下さい。喧嘩もいい。ときには命がけで戦わねけりゃいけないことだってあるよ。だけど、人を傷つけることは、自分も傷つけることだってことを、肝に銘じておいてほしいんだ。

あたしはツツパリを卒業する。決して、長いものに巻かれようとか、世の中に媚びて生きていこうと思ってるわけじゃない。戦わねけりゃいけないときには戦うけど、これまでみたいに、すぐ戦争だ、なんて考え方はしないよう努力するよ。できれば……女の子らしく、可愛いって、いわれてみたいし」

すすり泣く声が一段と高くなった。確かに、康子は、J学園の生徒を守る、いいスケ番だった。喧嘩早くて、すぐに匕首を抜く癖はあったし、怒らせると手負いの熊も逃げだすほどの狂暴さを發揮したが、それも今日限りで終わりというわけだ。

「スケ番の康子は、もういません。これからは、ただの向井康子です。ヤスコって呼び捨てで呼ばれても、街で目があっても、肩がぶつかっても、喧嘩を売ろうなことはしないつもりです」

パチパチ。康子が一礼すると拍手が巻きおこった。

そのあと、跡目を譲られた新女番長（この子もまた可愛かった）が、康子の教えを守り、これからもJ学園の平和と安全のために努力することを誓って、セレモニーは終わり。

サスガに、「学業にセイ出しておくれ」とはいわないあたり、康子も立場を心得ておる。

散会とともに、僕と親父、麻里さんは歌舞伎町に出た。康子は、後輩たちと二次会に向かったが、リュウ君誘われても、これはパス。

もともと硬派精神をウンヌンするヤカラとは肌があわないのだ。

「隆ちゃんもすっかりしないとね」

麻里さんが雑踏を歩きながらいう。今日の麻里さんは、お姉さんぽいシルクのブラウスにタイトスーツで、ぐつと渋め、親父も一応、紺のダブルで決めていたりして、ジーンズにスタジアムジャンパーの僕としては、冴木家のワードローブにおける不公平を糾弾したい気持ち

だったね。

「そうだ。お前もぼうつとしていると、どんどん女の子に相手にされなくなるぞ」

親父がいったので、僕は思わず親父の顔を見たね。いったい、親父にそんなことをいう甲斐性がどれだけあるというのだ。

無責任、無気力、労働心向上心道徳心欠如、バクチ好き、女好き、酒好きのこの人に。さすがに、むつとした僕の視線がこたえたのか、親父はコホンと咳ばらいをした。

「さて、久しぶりの新宿だが、もしお前がゲームセンターにでも行きたいというのなら、俺は麻里ちゃんともメシでも食っていく」

「あのね、セガレをゲームセンターに追いやつて家庭教師を誘惑しようなんて考えがアマいの。寄り道しないで、まっすぐ事務所に帰ろう」

僕はいつて、通りかかったタクシーに手をあげた。

「あら隆ちゃん。わたしならかまわないのに……」

麻里さんがいう。

「麻里さんがかまわなくても僕がかまうの」

「だったらお前ひとりで広尾に帰ればいいだろう」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。